

東北・日本女子、インカレを制す

日本学生選手権大会 2007年3月9-11日 栃木県矢板市

松澤俊行

今春大熱戦の末に幕を閉じたインカレリレー。O-NEWSに報じられた記事から展開を振り返り、さらに両校のOBからのコメントを掲載する。

2007年3月9-11日 栃木県矢板市
2006年度日本学生オリエンテーリング選手権大会 ミドル・リレー競技

東北・日本女子が優勝

<O-NEWS JAPAN 掲載記事より>

インカレリレーは3月11日、栃木県矢板市『矢板温泉～がんばり坂～』にて開催され、男子選手権は東北大、女子選手権は日本女子大がそれぞれ優勝した。日本女子大は2004年度から3連覇。

あいにくの雨の中、選手たちには厳しい条件でのレースとなった。スタート直後の上り坂から足場が悪く、転倒する選手も多く見られた。雨はすべての1走スタートが終わる頃には止み始め、午後にはすっかり晴れ上がり、表彰式は太陽も祝福を与えていた。

男子選手権は東北大学がミドルのシード選手を1人も使わないという意外なオーダー。しかし前日のミドルでも3位と調子のよかった長縄が快走を見せてレースを引っ張り、中間ビジュアルを1位で駆け抜ける。その後、東京大の佐藤、名古屋大の崎田と続く。しかし前評判の高かった京都大、大西が来ない。結局1走は東北・名古屋・早稲田・東京・静岡・茨城の順番で次走者へ。

東北大は2走目下がこれまた長縄に負けずに快走を見せる。ミドル2位の真壁が慶應大を2位まで押し上げるも1位の東北大との差は7分まで広がり、東北大の独走態勢となった。2走時点での順位は東北・慶應・早稲田・京都・東京・名古屋。京都大は津國が11位から4位まで一気に差を詰める。が1位との差は9分。優勝は絶望的となった。

トップをひた走る東北大を西村(京都)茂木(東京)藤沼(新潟)のシード選手たちが追う。中間の速報が放送されるたびに差は縮まっていく。ビジュアル区間に来たとき、岡崎(東北)と西村の差は1分強になっていた。そして西村の後方2分弱には茂木がいた。これは追いつけるのではないか? 決定

的だった優勝はまた分からなくなってきた。

9時半のスタートから2時間33分後、最初にゴールレーンに現れたのは東北大の岡崎だった。歓喜の声援、ウィニングラン、ペナチェック後の歓声の中、東北大学の2年ぶりの優勝が決まった。

2分後、西村は悔しさを顔いっぱいにしてフィニッシュ。茂木もまた、どこか混乱しているような「何がなんだかわからない」ような表情でのフィニッシュだった。



東北大学、ウィニングラン!
(写真:宮城島)

女子選手権は、ある意味予想通り、前評判どおりだった。序盤から日本女子大と筑波大の2強一騎打ちだった。中間ビジュアルで筑波大の豊田がトップで現れるものの、そのすぐ後ろに日本女子大の松永が続く。その差は最後まで変わらず、わずか5秒差で2走へタッチ。

2走は井手(日本女子)と稲葉(筑波)の両エース対決。これを制したのは井手だった。いまいち調子が出ない稲葉に対して井手は絶対調、54'06の全パターンでのトップタイムを出し、約6分の差をつける。男子と同様、ここで勝負は決まってしまうかに見えた。



日本女子大学、2走の井手から3走の笠原へトップでチェンジオーバー
(写真:宮城島)

3走は日本女子大はシード選手である笠原、筑波大は実力はあるもののこれまでインカレでは目立たなかった千葉。1つの走区で6分差がついたのなら、同じ1つの走区でひっくり返せるはず。とは言ってもこの差は厳しかったはず。だが、先にビジュアルに現れた笠原のすぐ後ろに千葉の姿。勝負は最後のわずかな区間に持ち越された。ビジュアル区間では2人とも「ここからミスするわけには行かない」と慎重に地図読みをしていた。

ビジュアル後もパターンの違いがあり、微妙に順位が入れ替わる。最終コントロールをチェックしたのは千葉が先だった。だが、このちょっとした手続きが明暗を分けた。千葉はパンチ後地図を見てからテープ誘導を確認。しかしそのときすでに前に笠原の姿があった。笠原はパンチの前にテープ誘導を確認、千葉が地図を見ている隙に先行したのだ。

ほんの僅かな差により、そのままゴールレーンを笠原が逃げ切り、日本女子大が3連覇を成し遂げた。前回まで優勝のメンバーから一新しての連覇は初だという。



リレー女子選手権の最終走者。最終コントロールからの勝負となった。逃げる日本女子大学の笠原と追う筑波大学の千葉
(写真:宮城島)

本当に互角の勝負を繰り広げた日本女子大と筑波大だが、どちらのチームも全員が3年生以下。2月の関東リレーでは筑波が勝ち、インカレは日本女子。来年もこの2チームの勝負が非常に楽しみだ。

(宮城島俊太)



筑波大学・千葉、全力の追上げもあと2秒及ばず。(写真:宮城島)

東北大学 OB が語る

記 高橋元気 (東北大学 2002 年入学)

「団体戦は部員全員で戦うものだ。」

もちろんリレーを走るのは3人だけだが、こんな言葉もあるので、部員全員を束ねる主将に焦点を当てて、東北大学男子の団体戦優勝までの経緯について語ってみたいと思う。

「東北大は層が厚い」こんな風に言われるようになったのはいつからだろう。少なくとも自分が東北大OLCの一員になったときにはもう言われていた気がする。併設リレーでの東北大の活躍ぶりを見る限り、確かにその通りだと思う。それに対し、「今年の東北大は、層は厚いがパンチのある選手がいない」という記事をいつか読んだ覚えがある。自分は、この記事を読んで「そんなことはない！」と怒りはしなかった。この記事も確かにその通りだと思ったからだ。

このことは、部員も感じていたことだった。とりわけ中心学年である3年の、団体戦優勝に対する危機意識は高かったように思う。それは、団体戦メンバーを決める話し合いでの杉山主将の「今の東北大では、3人ともベストレースしたとしても京大に勝てやしない」といった内容の発言からも分かった。主将は全体としてのレベルアップの必要性を訴えた。

そしてそのために考えられたのが、セレクションレースの案である。リレー前日のミドルの結果で、団体戦のメンバーを決めようというものだ。その前年と2年前には部員全員の投票によって決めていることを考えると、全く新しい方法である。この方法は、直前までメンバーが決まらないため、必然的に部員全員の努力量が増えるし、その時に最も調子の良い人が選ばれることになるというメリットがある。

しかし、この方法にはデメリットもある。例えば、ミドルが終わってからリレーオーダーを提出するまでの短い時間に、走順や併設メンバーまで決めることの難しさである。それだけでなく

も、事前のメンバー内での打ち合わせは重要であり、やはり直前に決定することは危険だ、という意見が多かった。だが、この方法が危険なのは当然だった。優勝するには本当にイチかバチかの方法しかないほど、当時優勝候補の京大とは実力差があることを、この話し合いで主将は訴えていた。

この危機意識が全員に伝わったかどうかは定かではない。しかし、最終的に今年の団体戦メンバーが、ミドルではないもののその前のセレクションレースで決めることになったことを考えると、主将の意図は伝わったようにも思う。賛否両論はあったが、レースで上位になるということはそれだけの実力があるということに他ならない。そしてその結果選ばれたのが長縄・日下・岡崎の3人。いずれも走力派だったように思う。聞いた話によると、このメンバーなら十分優勝の可能性があると主将も満足だったらしい。

以上が、今年の東北大リレーメンバー選出方法である。この記事では、当日のことには全く触れていない。それは、メンバーの決め方も含めた事前準備こそが重要だと考えるからだ。そして、その事前準備に与える主将の影響はとても大きい。その年ごとの東北大のカラーは主将によって決まると言っても過言ではないと思う。そんな影の立役者である今年の主将の杉山を労い、この記事締めたいと思う。

(高橋元気)



静かにリレーのスタートを待つ東北大学・長縄知晃(左)と京都大学・大西康平(右)
(写真:宮城島)

日本女子大学 OG が語る

記 橋本陽子

(日本女子大学 2002 年入学)

去年のメンバーから一新した日本女子大学は3連覇という結果を残す事が出来た。新たなメンバーで挑んだ今回のインカレ。3人の選手にはそれぞれ、大きなプレッシャーがあったであろうと思う。周囲からの「期待」、レースへ

の「不安」、押しつぶされそうになりながら、3人でつないだリレー。「3連覇」ではなく、これは日本女子大学の新しい「勝利」であると思う。

スタート前、アップを終えた1走の松永が井手と笠原に泣きながら飛びついた。あまりにも大きなプレッシャーに耐え切れなかったのだろう。そんな松永を抱きしめて励ます井手と笠原。自分自身も不安であるだろうに先輩としての強さを見せる2人。この3人の姿を見て、今年のリレーはいける、と感じた。

スタートで飛び出した松永は、しっかりと1走の役割を果たして帰ってくる。2年生でインカレの1走という大役は不安も大きかっただろうが、この1年間での飛躍的な成長を發揮した。2走井手は、メンバー全員が選手権初という状況で、自らを先輩的な立場におき、メンバーの核としてその威厳を見せた。常に冷静さを保ち、プレッシャーを跳ね除けた。3走の笠原は、レースが展開していく中、3走のプレッシャーをひしひしと感じていただろうと思う。だが、井手からタッチを受けた後は、いつも通りの落ち着いたレースをやり遂げた。ビジュアルからの筑波との接戦。ラスポ~ゴールの冷静な走りは彼女だからこそ出来たと思う。

ゴール後、3人はまた抱きしめあって泣いた。「期待」に応え、「不安」に勝ったリレーで3人が掴んだものは大きい。また、その姿は後輩達にきっと何かを残せただろう。

去年と比べて人数が減った日本女子大学だが、早稲田、理科大学とともに切磋琢磨し合いながら楽しく練習をしている。全員が全員を認め合う環境だからこそ、仲間を信じきるレースが出来るのだと思う。また来年、新しいOLCとしてインカレに挑み、新しい「勝利」を掴んでくれることを期待したい。
(橋本陽子)



日本女子大学 1 走・松永真澄(右)から 2 走・井手恵理子(左)へ(写真:宮城島)

(記事とりまとめ:松澤俊行)